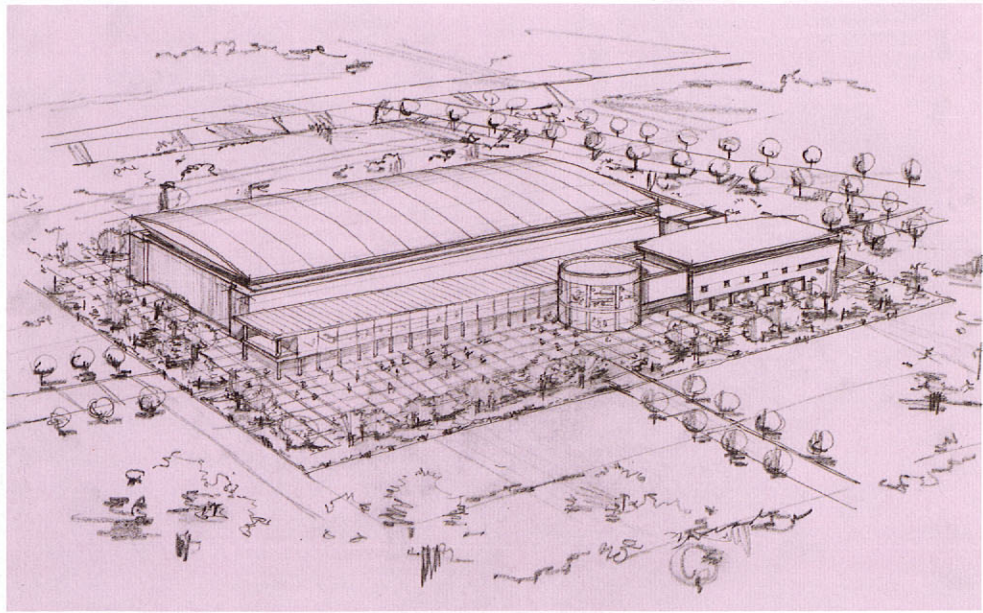


1999「くまもと未来国体」のシンボルマーク決定



人、光る。
くまもと未来国体

一九九九年開催の第五十四回国民体育大会「くまもと未来国体」のシンボルマークが決定しました。
このシンボルマークは、熊本の自然の水と緑、そして健康的なさわやかさをイメージしたものです。
また、二十一世紀に向かって力強くはばたく人をデザイン。炬火を掲げて自ら光り、周囲も光らせ、全ての人たちへのやさしさをも表現しています。
国体の標語「人、光る。」、および愛称「くまもと未来国体」にふさわしいものとなっています。



経済活性化へ高まる期待！

人、物、情報の交流拠点建設へ

産業展示場の設計進む

地元経済界から、早期完成の要望が繰り返されていた産業展示場（仮称）は、平成十年三月の完成をめざして設計が進められています。
展示場は、業界団体や企業などが見本市や展示会を開催し、商談取引やPR、情報収集の場として利用されるものです。
ここでは、県内外の人、物、情報、技術が一堂に集まり交流が行われるため、経済効果や技術の高度化などを本県にもたらし、経済活性化や産業振興に大きく寄与するものと期待されています。
建設予定地は、県道熊本益城大津線（通称第二空港線）と九州縦貫自動車道の交差する上益城郡益城町古閑・福富地区にあり、熊本空港インター（仮称）の建設予定地に隣接しています。
施設は、三千人以上の大規模な集会やイベントにも対応できる広さ約八千平方メートルの展示ホールを中心として、五百人が収容できる多目的室や会議室、レストラン、二千台収容の駐車場などが整備されます。

本県期待の試験検査・研究機関

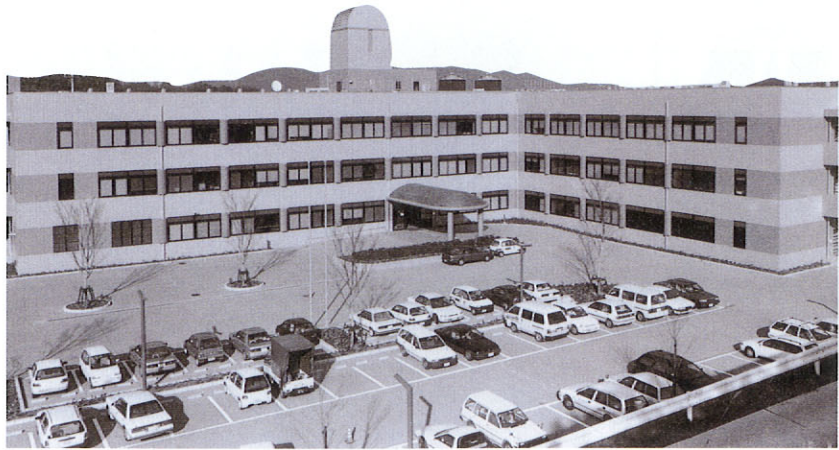
熊本県保健環境科学研究所が移転竣工

中核的試験研究機関として さらに、グレードアップしました

■より高度で精密な検査・研究に対応

水質検査や食品検査などを行う県衛生公害研究所が、熊本市南千反畑町から宇土市栗崎町に新築移転。三月二十三日に落成式を迎え、名称も「県保健環境科学研究所」に変わりました。

母体となった県衛生公害研究所は、昭和二十三年の設立。年々、検査業



最先端の試験研究機器を導入

務が増え手狭になってきたため、その都度研究所を拡張してきましたが、最近では、施設や設備の老朽化が目立ってきたことから、敷地、環境面で条件の良い宇土市への移転となったものです。三階建ての建物は、近代的な外観もさることながら、検査・研究のより一層の高度化や精密化を図るため、電子顕微鏡室やケミカルクリーン室など、最新鋭の設備が導入されることになりました。

■新たな課題へ対応

産業の活性化やライフスタイルの変化とともに複雑になってきた廃棄物は身近な問題であるとともに、自然環境への脅威となりつつあります。同所では、時代のニーズともいうべき廃棄物対策など、新たな検査・研究への対応に向けて整備が進みました。また、組織的にも既存の各部の名称をそれぞれ県民に分かりやすく改めるとともに、県民が大きな関心を寄せている地下水についても、水質科学部の中に新たに「地下水科学室」を設置し、水質検査のほかに、地

下水の汚染源の究明、さらには水質保全に関する研究などにも取り組んでいく予定です。

■地球的規模の環境問題も

同所では地下水など身近な地域的な課題にとどまらず、広域的な環境問題にも取り組んできました。新設の「環境生物実験室」では、生物の棲み分けによる環境調査や、環境分析を行います。また、「酸性雨」といった地球規模の調査研究についても、九州各県の研究機関と共同研究を行っています。

さらに足元を見れば、研究職員が安全面を考えた空気清浄装置や無菌室、検査に使った廃液や臭気を清浄化するドラフトチャンバーなどは、地域環境を配慮した設備となっています。

■開かれた研究機関をめざして

毎年、開発途上国からの研修生の受け入れや派遣指導を行ってきましたが、今後も国際貢献の一端として、開かれた研究機関をめざしていきます。

また、環境問題に対する関心・理解を高めていただこう、所内見学にも対応しています。多くの県民の皆様の来所をお待ち申し上げます。